

科挙を描く明代短篇白話小説 ——『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』から

廣 澤 裕 介

はじめに

唐宋の時代から、科挙は知識人社会の関心事であり、共通の話題であった。実際に起こった出来事が試験の前後に交わされる噂話や評判と結合して美談や奇聞となり、時間と伝承の積み重ねによってまさに物語と化すものがあっただろう。科挙は社会的身分の劇的な上昇をもたらすがゆえに、明代に成立した白話小説の中でも不可欠の、おきまりの場面となっている。

かつて澤田瑞穂氏は、中国近世における、いわゆる知識人の立身出世の物語（発跡談）について次のように述べた¹⁾。

世が太平になり、文官による行政組織が完備すると、武人の社会的地位は従って下降する。…（中略）漢民族特有の根強い文治主義はやがては軍人を低い地位に踏みつけ、文官優位の政治体制を回復する。外敵に備えるために良将の出現は要望されるにしても、発跡談の主人公とするには時代感覚がずれてしまっている。立身の可能性はただ文官コースだけとなり、しかも帝王というゴールはもたない。どんなに破格の出世でも尚書（大臣）くらいが関の山という小型の成功談がここに生まれる。武人帝王発跡談に対する、いわば第二種の士人発跡談である。

また、次のようにもいっている。

明清時代の小説・戯曲・弾詞などは、みな科挙及第を契機とする落魄と発跡の物語であると称しても過言ではない。当初の発跡変泰が主として武人の立功と栄達とを意味したのが、…（中略）士人文官の立身を意味するようになったのは、すべてその基底たる社会勢力の変動によることである。

氏のいうように平和な時代の出世談は、知識人を主人公にしたものが多くなり、それらには武人もののような壮大さや爽快さは見られない。しかし、明代を舞台にした作品は、当時の人々にとってどこか自分たちとの連続や親近さを感じる、日常的で、等身大の悲喜劇のドラマであり、その生活感覚に根ざした、出世に対する見方や願望などが息づいている。実際にその中の科挙は、人々のリアリズムとロマンを反映しながら、実に多様な内容と問題を有している。小論では、明代末期に流行した三つの小説集『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』を採り上げ、各小説集が収録する科挙関連の作品について考察を加えてゆく。このテーマに関しては、澤田氏以降、山口建治氏や荒木猛氏らの論考があり、小論もその恩恵にあずかっている。

現在、この三つの小説集は「三言」というシリーズとみなされているが、実際に各小説集の収録作品における科挙の描き方を見ると、それぞれに異なる傾向を持っているようである。従来の「三言」研究は三つの小説集に共通するものを見い出さんとなされてきたが、それぞれには独自の特徴や傾向があると思われる。小論は作品ごとの特徴について考え、三つの小説集のそれぞれの特徴を

明らかにしてゆきたい。

I 『古今小説』の科挙物語

I-1 明代を舞台にした作品の中の科挙

『古今小説』の中の明代を舞台にした作品は、巻一、巻二、巻十、巻二十八、巻四十の五つである。以下、それぞれの作品について、科挙に関わるシーンを確認してゆく。

巻一「蔣興哥重會珍珠衫」は、旅商人の蔣と妻三巧兒の物語で、彼ら夫婦と、三巧兒の不倫相手の陳大郎、陳の妻平氏の四人が主な登場人物となる。元来は二組の夫婦であった四人が、「珍珠衫」という風変わりな一着の下着を手から手へと譲渡して、パートナーを組み変えながら、物語は展開してゆく。

この中で科挙に関わるのは、脇役の呉傑という進士の周辺のみである。彼は物語の終盤で、離婚した蔣と三巧兒を復縁させ、その陰徳ゆえに、中央政界で出世し、三人の子供が科挙に合格する（連生三子、科第不絶）。彼は初登場の場面ですでに進士であり、その受験に関わる内容は全くなく、その息子の科挙及第は、呉傑の義行を称揚する紋切り型の一節である。科挙は、物語の重要な展開に関わるものではないといえる。

巻二「陳御史巧勘金釵鈿」は、変装によって強姦と金銭略取の事件が起こり、変装によって事件が解決する、ディテクティブ・ストーリーである。前者の変装は、無学な農民が知識人に扮して文雅な言葉をたどたどしく使いながら事件を起こし、後者は湖広出身の御史陳濂が商人に扮してすらすらと江西方言を使いこなして難事件の犯人を捕縛するという、二つの変装が重要なポイントになる作品である。科挙に関しては、物語の最後の場面で、事件の容疑者とされた主人公が、冤罪が晴れたあとに学問に励み、科挙に合格して、幸せになる。物語の中心となっている事件はすでに解決しており、その後日談として記されるにすぎない。この作品の科挙は、巻一同様、物語の主たる展開に関わっていない。

このように物語がほぼ収束している場面で、主人公自身（あるいは比較的中心的な登場者）やその子孫が科挙に及第するという一節が添えられるのは、主人公たちの幸福と物語のハッピーエンドを標示するための付加的なものである。物語が中心としてきた話題はすでに収束しており、そのハッピーエンドにさらに花を添えるために挿入される常套といつてよい。その一節があることによって、読者は物語の終焉が円満な形であること、半ば期待していたエンディングであることを確認するのである。

巻十「滕大尹鬼斷家私」と巻二十八「李秀卿義結黃貞女」の物語は、詳細な内容については省略するが、前者は遺産相続と隠された遺言書の顛末を、後者は女性の変装と貞義を題材とした作品である。それぞれの作品の最終盤で、「連生三子、讀書成名」、「夫婦相愛、連育二子、後來讀書顯達」と主人公の家族の科挙及第を思わせる内容が付される。巻一と酷似した表現・内容であり、複数の子孫が合格するのは、後述する、自身が三つの尚書になるパターンに準じる幸福のシンボルであるようだ。

最後に、巻四十「沈小霞相會出師表」は、嘉靖朝に実際にあった政治がらみの事件を題材とした作品である。朝廷を専横した嚴嵩・嚴世蕃父子に反抗した沈鍊とその家族の物語で、親族が次々と

殺害され、嚴父子の失脚の後に、生き延びた家族たちが再会する。長男の沈襄は父の名誉回復とともに貢生の資格と官職を得るが、これは科挙の試験以外の任用制度によったものである。また、物語の最後の部分で、沈襄の弟と息子が同じ年に合格し進士になるというが、これもそれ以降に物語の展開はなく、また、その二人が進士になったという事実は歴史資料などでは確認できない。おそらくハッピーエンドを強調するために付け加えられたフィクションであろう。

ここまで明代を舞台にした全作品について見た。個々の物語の内容は大きく異なるが、いずれにおいても科挙の記述は作品の最後に登場人物の幸福に花を添えるためにあり、その内容・表現は定型的で、また物語を展開させる要素にはなっていない。つまり、明代を舞台にしたものでは、科挙という題材を積極的に取り上げていないのである。科挙が物語の展開に関わるものは、舞台が明以外の作品にはあり、次節ではしばしそれらを通して、『古今小説』の知識人の出世について見てゆきたい。

I-2 『古今小説』における知識人の出世と科挙

『古今小説』は全体で四十篇の短篇小説を収録し、前節の五篇以外は、すべて明以前を舞台とする。「明代」という枠をはずせば、知識人の出世を描く物語は少なくない。

例えば、知識人の出世談の一つの典型とされる巻十一「趙伯昇茶肆遇仁宗」は²⁾、北宋期を舞台とし、不遇の知識人が市中で皇帝と出会って出世する話である。

主人公趙伯昇は、お忍び中の皇帝と面会し、皇帝によって直接にその文学作品が評価されて抜擢される。これは、皇帝自身の肝いりで抜擢されるので、試験以外のルートでの出世である。明代の科挙では、郷試では地方官や中央から派遣された試験官によって選抜が行われ、皇帝の目に直接接触される機会は都での殿試までおあずけである。しかもこの作品では文学の才能を評価されている。明代後期の受験制度では、八股文という試験独特の文体をマスターする必要があったように、合格のための技能が必要だと考えられ、文学に関する能力は結びつかないと信じられていた。八股文では自分の持つ力量を十分に発揮できない、文学こそ自分の能力が発揮できる分野だと信じていた受験生たちには、文学での登用は切実な願望だといえる。また、かつて山口建治氏が「明代になって科挙制度が整備され、馬周や趙伯昇のような僥倖はもはや望むべくもない夢物語になっていた」³⁾と指摘したように、当朝の皇帝が市中を徘徊しているという内容が同時代に書かれるはずもない。これは古い来歴を持つ喜劇的作品であり、上記のような内容も時代設定が北宋であるからこそ成り立つのであり、明代の知識人にとってはあこがれこそすれ、所詮は非現実的なファンタジーであったのだろう。

次に、試験に合格して出世を果たす、巻二十三、巻二十七、巻三十四の三篇を見てみたい。

巻二十三「張舜美元宵得麗女」の主人公の張舜美は、郷試に落ちて杭州で暮らし、元宵節の夜劉素香という美しい女性と出会い、歓悦の一夜をともにする。二人はそのまま駆け落ちするが、途中ではぐれてしまいい、張舜美は病気になってしまう。

さてさて、舜美はその店で病を癒し、日に日に回復いたします。故郷に戻ろうとはせず、宿屋で五経や歴史を勉強しました。月日の経つのははやく、またも上元節の燈籠祭りになりました。舜美は昨年のことを思い起こし、昨年同様に十官子巷にいて様子を見ますと、ああ、風景は

昔のまま、ただあの人が目の前におりません。悶々として部屋に戻ろうとし、秦少游学士が作った『生查子』詞を歌い出します…（詞の引用。略）。舜美は気を落とし、涙を流して帰ります。ああ、事物はもとのまま、人だけが変わりゆくとは。哀しい気持ちで絶望し、生涯妻帯せぬことで素香の愛情に答えると誓いをたてました。杭州にてたちまち三年が過ぎますと、郷試の年になり、舜美は主席の解元で合格しました⁴⁾。

このあと、会試に向かう旅中で偶然素香と再会し、そして進士に及第して帰郷すると、両家共々結婚と出世を喜んで、物語は終了する。この中での科挙は、主人公と出奔した娘の状況を好転させる大きな契機となり、物語を展開させる重要な要素となっている⁵⁾。しかし科挙や受験勉強に関する記述は極めて少ない。宿屋での勉強の部分と郷試の部分がそれで、その後には「一路至京、連科進士（一路、都にたどり着き、立て続けの試験で進士になりました）」と、これだけである。いくら短篇とはいえ、合格までの猛勉強や苦労をもう少し描いてもよさそうだが、作品はむしろ駆け落ちの途中で行方不明になった素香を思う様子に筆を割く。そもそも物語の冒頭には、

本日、何の話をするかといえ。なんと一人のべっぴんさんが、燈籠祭りの夕べに遊びに出かけ、遊び好きな若い学生さんに出会ったがために、たいそう面白い顛末になったこと。さてもその後に無事に夫婦となれましたでしょうか。それは続きをお聞きあれ⁶⁾。

とあり、作品自らがラブロマンスだと規定している。この恋がどうなるのか、詩詞を歌いあげながら語るもので、科挙に関する記述が少ないことも頷けよう。

次に、卷三十四「李公子救蛇獲稱心」を見る。

南宋の熙寧年間、父の赴任地へと旅する李元は、途中子供に苛められていた蛇を助ける。その帰路、水底の竜宮に連れて行かれ、竜王がお礼をするから欲しい物をいえという。「日頃からの『称心（願いが叶う。つまり科挙に合格）』さえすればよい」と答えると、竜王は「称心」という名前の孫娘を嫁にくれた。竜王の血を引く称心は当然不思議な力を持っていて、試験前日の場面は、物語のクライマックスとなっている。

李元は、称心が非常に賢く、何でもできることを知っておりましたので、そこでたずねます「むかしあなたの父君はいつておりました、もし科挙に合格したければ、あなたにきっとたずねなさいと。明朝私は試験場に入ります。何かよい考えを教えてくださいませんか？」称心は言います「今晚私は試験問題を取ってきましょう。あなたは家であらかじめ答えを書き上げ、明日はそのお手本通りにお書きなさい。」李元は「それってとてもいい考えだけど、試験問題はどこから手に入れるんだい？」称心は「わたしの閉目作用（一種のテレポーテーション）を、絶対にのぞき見しないでください」といいましたが、李元には信じられません。称心は部屋に入ると、堅くその扉を閉ざします。一陣の風が起こるのが聞こえ、カーテンが全部巻き上がります。一更（約二時間）あまりすると、称心は戸を開けて出てきて、試験問題を手に持って李元にわたします。李元はとても喜んで、思う存分出典を調べあげ、答えの文章を作り上げました。次の日会場に入ると、案の定その問題で、筆をひとはらいして会場を後にしました。その後も同様に、三度の試験はすべて称心が体を飛ばして試験会場に入り、問題を盗んできたおかげです。結果発表の日になりますと、李元は案の定高い順位で合格しております⁷⁾。

この後、李元が地方官の職を得て、三年の任期を勤め上げると、称心は突然に別れを告げる。李元は追いつがろうとするが、称心は風とともに空の彼方に消え、物語は終わる。

作品は自らのテーマを因果応報としているが⁸⁾、竜宮や竜王の孫娘が登場することから見ても、おとぎ話のようなファンタジーと見るべきだろう。科挙のシーンは、具体性のある描写からはほど遠く、試験問題を不思議なパワーを使って盗み見てくるという展開は、受験生の願望がある意味如実に表れてはいるが、あまりにも夢想的である。この作品は、確かに科挙合格が知識人の幸福であることを反映しているが、実際の科挙や受験生を具体的に描こうとしたものではない。

次に、上記の作品とは大きく傾向が異なる、卷二十七「金玉奴棒打薄情郎」を見たい。

宋の紹興年間、臨安の「団頭（乞食組織の頭領）」であった金老大は、豊かな財産を築き、娘玉奴を学問のある知識人に嫁がせたいと考え、近隣の紹介で、貧乏書生の莫稽と結婚させる。玉奴からの金銭的援助を得た莫稽は学問が進歩し、科挙に合格して進士になる。彼は栄達を手にすると、卑賤出身の玉奴親子を恥じて疎ましくなり、地方に赴任する際に玉奴を殺そうと川に突き落とし、逃げ去る。任地に着いた莫稽は、上官の許徳厚の娘との結婚を勧められ、承諾。結婚式の夜、莫稽が夫婦の部屋に入ると、突然数人の女の使用人によって竹棒で乱打される。助けを求めて目の前に座る新婦の顔を見れば、玉奴。玉奴は川で許徳厚の舟に偶然助けられ、養女となって、莫稽との再婚を謀ったのだった。莫稽は前非を悔い、許しを得て、その後は仲良く暮らした。

科挙及第は、知識人の生活環境を激変させる。及第前の貧窮と及第後の栄華とは大きな格差がある。それゆえに、人は古い恩情を忘れ、身勝手に新しい環境に見合うように志向する。人の心の変わりやすさを描いている。

この物語の中で莫稽の受験勉強や科挙に関わる部分は次のように記されている。

さて金玉奴は自分の家柄がよくないことを気にしており、なんとかその状況から抜け出そうとして、夫に懸命に勉強するようにいいます。古今の書籍とあれば、高値も惜しまず、買って夫に読ませます。文章や解説が上手い人を雇うお金もケチりません。また大金をはたいて、夫に交際をひろげ評判を高めさせます。莫稽はそのおかげで学力が日々向上し、名声が日々高まります。二十三歳で解元になり、続けざまに進士に及第します⁹⁾。

ここでは、受験勉強をする莫稽の姿よりも妻玉奴の懸命さを描くことに執心し、卑賤な身分である妻（女性）こそ献身的で夫との愛情を貫こうとし、それに対し科挙に合格するほどのインテリがかえって薄情である対比するのである。受験生当人や試験に関する内容が少なく、その妻の奮闘を描くことに重点があり、彼女の物語として読むべき内容といえる。

科挙が登場する物語としてもう一つ特徴的なのは、合格の前後の展開がほかの多くの作品とは逆であり、合格後に登場者、特に妻にとって悲劇的な展開を迎える点である。一般的には合格すれば、それ以前の苦難、登場者にとっての都合の悪い点、社会規範から逸脱した不道德な行為までがすべて帳消しにされ、物語はハッピーエンドに向かって突き進んでゆく。それに対し、この作品では、玉奴にとって不幸な、悲劇的な展開になってゆき、手放して喜べるような幸せをすぐさま手にする展開にはなっていない。

この内容をみれば、関連資料として指摘されている『西湖遊覧志餘』卷二十三「委巷叢談」、『情史』卷二「紹興士人」などと近い関係にあることは間違いないと思われる。ただ、知識人が合格後にそれまで尽してきた女を捨て、上司の娘との結婚を望むという物語の大きな枠組みは、宋元時代に流行した南戯の「書生負心」の作品と非常に似通っている¹⁰⁾。

南戯の「書生負心」に関してはすでに研究が進んでおり、南戯の初期の「王魁」「趙貞女」などの作品は、情を尽くした妻や妓女を男が科挙合格後に裏切り、高官や上司の娘と結婚した後にその崇りに遭うという内容だとされている。そして初期の作品では悲劇的傾向が強かったが、次第に結末がハッピーエンドに変化してゆくことも明らかになっている。特に中里見敬氏には、南戯と白話小説の内容の連動を見た興味深い論考がある¹¹⁾。この巻二十七の悲劇的展開と最終的に幸福な結末を迎える点は、南戯の影響から出ているのかもしれない。

I-3 『古今小説』の中の科挙

本章では、『古今小説』における科挙を描く作品を見てきた。

その明代を舞台にした作品の中には、科挙を主要なテーマとして扱ったものは見られない。『古今小説』は、そのような作品を一篇も採用しなかったことになる。

また、参考としてみた、明代以外を舞台とする作品においては、巻二十三と巻二十四はいずれも「おはなしの世界」の出来事のような内容で、巻二十七については知識人の妻を中心に心情を寄せて読むべき作品となっていた。これらの作品には、すでに基づいた先行の作品や資料が指摘されているように、すでに流通していた定評のある作品をそのまま借用したり、参考にして成ったものであろう¹²⁾。その物語の中心的内容は、科挙や知識人の出世の他にあって、それゆえに科挙に関わる具体的、写実的な記述が乏しいのである。

『古今小説』が収録する作品で、科挙による出世を描くのは宋代を舞台にしたものがほとんどで、全体としても科挙に関して淡泊な印象がある。特に明代の科挙を積極的に描く作品がないことは、「三言」の他の二集とは異なる、一つの特徴と思われる。

II 『警世通言』の明代を舞台にした作品の中の科挙

『警世通言』には明代を舞台にした作品が十二篇あり、その中でも巻十七「鈍秀才一朝交泰」と巻十八「老門生三世報恩」は、科挙による知識人の出世を描いたものとしてよく知られ、また「三言」、短編白話小説を代表する作品となっている。まずは巻十七「鈍秀才一朝交泰」の内容から見てゆく。

II-1 『警世通言』巻十七「鈍秀才一朝交泰」

天順年間、延平府将楽県の馬任は、学問の実力と声望のある書生だったが、占師には三十一才まで不幸と不遇が続くといわれる。やがて吏科給事中だった父が、宦官王振を弾劾して、逆に無実の罪に落とされて死ぬ。馬任は財産を失い、友人知人は離れ、好意で援助の手をさしのべた人には次々と禍が降りかかる。舟に乗ると川が決壊、家庭教師をするとその子が死亡、人が歓待するとその家の父親が死んだり、火事が起こったり。やがて付いたあだ名が鈍秀才。路頭に迷い真定府の龍興寺にいるところに、許嫁の黄六娘が金百両などを送ってきて、再び科挙を目指す。その年に土木の変が発生、王振らは失脚し、景泰帝が即位して、父の名誉が復活したのが馬任三十二才のとき。進士になって財産を取り戻し、やがて礼・兵・刑三部の尚書となり、一族は繁栄した。

物語の舞台が天順年間(1457～63)だとすれば、これを収録する『警世通言』が出版された天啓

四年からは百六十年ほど前のことになる。主人公の馬任は、物語では景泰年間に進士になるのだが、荒木猛氏が指摘するように、同名の進士は明代には確認できず、また各部尚書を歴任する同名の人物もいない¹³⁾。物語の最後の部分で「現在でも、延平府の人は科挙を目指してはまだ及第できていない読書人を鈍秀才になぞらえている¹⁴⁾」と、延平では「鈍秀才」(人物? 物語?)がよく知られていることをいう一節があるが、事実に基づくものではないらしい。

この物語の中心は、知識人の馬任が遭う不幸の連続を滑稽に描くところにあり、作品はその不幸を「運命」と強調する。彼が置かれた状況が絶望的で、回避不能であると読者に納得させるため、いくつかのマイナス要素が複雑に絡まっている。まず十一年間不幸が続くという占い師張鉄口の言葉がある。この予言は呪術的な要素で、馬任の人生、そして読者を精神的、直感的に呪縛するのである。父親と宦官王振との政界での対立は、政治的、社会的なマイナス要素であり、王振が中央政界でのさばっている間は馬任の科挙合格や出世はまず望めず、またその余波で頼るべき親類や知人も彼から遠ざかるようになる。また人間関係では、金持ちで陰險な黄勝(黄六嫖の兄)の妨害があり、それによって社会的地位や人的なコネクション、財産を失ってゆく。さらに物理的、生活上でのマイナス要素として不幸な「運命」を補強するのは、金銭の問題である。

金銭に関わる描写は、市井の民衆を描くことが多い白話小説全般にいえる特徴であり、それによって物語にリアリティが補充される。この作品は特に金銭の得失・多寡が人間の境遇に密接に関わることを具体的に述べ、「五両」「三両」「五錢」などと、馬任がもの見事に金銭を失い、困窮してゆく過程を語ってゆく。逆に、上記の不幸な状況を作り出す要因が徐々に解消してゆき、黄六嫖からの資金援助を受けた場面で馬任は「以前は貧しさゆえに、わたしの学問は荒廃してしまった。いまは十分な金を灯火の費用にできるので、来年秋の郷試で合格したなら、お嬢さんとお会いいたしましょう¹⁵⁾」と、お金と試験勉強の関わりを当然のものとして語る。このように、金銭に関わるものがあちこちに、さりげなく、そして逐一描かれている。

金銭と科挙という問題を露骨に描くのは、黄勝がワイロで郷試に合格する場面である。

さて黄病鬼の黄勝は、馬任がいなくなってから、当初は馬任が地元に戻って来ることを心配していましたが、学政が学籍(受験資格)を剥奪すると、もう帰って来るまいと思い、また人づての話では、彼は趙指揮の食糧運搬船と一緒に上京し、黄河が決壊して、沈没してしまったとのこと。心配事がなくなり安心すると、朝夕六嫖に他の男と婚約しろと強いますが、六嫖は、死んでも二夫につかえぬと誓います。天順晩年に郷試があり、黄勝はコネを使ってワイロを送り、金で合格を買いますと、地元中のおべっか使いが門にあふれます。六嫖がよい年頃でまだ結婚していないと聞くと、結婚の申し込みが終日ひっきりなしです。¹⁶⁾

ワイロによる郷試合格は、筆者には唐突、かつ十分にショッキングな内容に思えるのだが、それが非常にあっさり書かれている。この唐突に出てくる内容に対し、もし当時の読者が違和感を持たずに、スムーズに読み進めることができたのであれば、それはおそらく、その種の話題をまことしやかに交わしている社会実態があったからだろう。むろん白話小説はそのようなスキャンダラスな社会の一面を書くことを好むものだが、読者たちは、おそらくその種の話に日常的に接し、それが小説が描く絵空事ではない、実際にあり得るとする感覚や経験(聞き覚え)があったのではないか。これなどは当時の人々の一般的な認識があらわれている部分だろう。

さて、ワイロで挙人となった黄勝は、会試を受けるために上京するが、過分の幸福に自己をコントロールできなくなり、遊廓に通い詰めて、病を得て死に至る。そこで物語は「楽極まりて悲生ず」

と付言し、不当の栄誉を得たために命運が尽きたと結論づける。そもそもこれが通俗作品である以上、その結末の厳格な掟として馬任と黄六嬢のハッピーエンドを書かねばならず、そのためには黄勝という邪魔者を消す必要がある。彼の合格はそのための伏線であり、それを踏まえた形で、通俗小説に不可欠な運命論や因果応報を付加して、彼の死は当然の報いという処理をする。

このような念の入った運命観は、馬任のたどる人生、また黄勝の人生においても張りめぐらされている。それに関し、かつて澤田氏は「個人の社会的地位と才学とは矛盾する場合が多い。鈍才でも情実と賄賂で合格できるという手もある。学力があっても縁故と金を持たない者はいつまでも下積にされる。そういう不平と憤りが、最後にはすべてを超絶的な運命の気まぐれに帰してあきらめるといふ結果にもなるのである」と論じている¹⁷⁾。本来は知識人の中の抜けた、不運の連続をおもしろおかしく描く作品だが、物語に挿入された「萬般皆是命、半点不由人（すべては運命、人にはまったくどうにもできぬ）」という諺などに敏感になるとずいぶん深刻に見える側面を持つ。

知識人の出世談にからむ運命論については、澤田氏以降にもたびたび議論されてきたが、明代の読者たちにとっては、至極当然のものだったようだ。宋代の文言作品における知識人の出世談について論じた岡本不二明氏は、「この種の記事に見られる『前程定まれり』『人生万事、素より定まらざるや』『蓋し幽冥中に已に之を知れり』などの言葉が語る宿命論的な因果応報にそって話が進んでおり、物語としての工夫がほとんど見られないのが特徴といえは特徴である」¹⁸⁾と、「宿命論的な因果応報」の常態化を指摘している。岡本氏の指摘に従えば、運命論にからませた展開の仕方は、文言作品で習慣化した、すでに歴史を積み重ねた一つの形式となっていたのである。この作品は、白話小説でそれを踏襲したもので、読者にはおきまりのパターンだったのだろう。

この作品でもう一つ注目したいのが、馬任の進士及第までの過程と出世してゆく過程が、簡略ではあるが、順を追って逐一記される場所である。

黄六嬢お嬢さんは、再度王安を使いやり馬任の仮住まい先にお金を送り、馬を納粟監生にします。次の年の春に、国子監内の試験でトップ合格になり、秋の郷試では解元になります。仮住まい先で結婚式の準備を整え、黄六嬢と結婚します。次の年には第十位で会試に合格し、殿試では二甲で合格し、庶吉士に任ぜられました。上奏文を提出して故郷に帰って墓参りをするため暇を請うと、天子から許しが出来ます。…（中略）後に馬任は礼部・兵部・刑部の三つの尚書をつとめ、六嬢お嬢さんは一品夫人に封じられました。生まれた二人の子は、どちらも進士となり、官僚となる子孫が途切れませんでした。¹⁹⁾

人民出版社版の注釈によれば²⁰⁾、故郷を離れて他郷にあるものが手っ取り早く科挙の受験資格を得るために納粟監生（金銭を納入して資格を得た監生。監生は郷試を受ける資格が得られる）となることがあったようで、資格と身分を手に入れてから、実力で科挙に合格するというプロセスは、当時の制度に準拠した記載なのだろう。作者や読者にとって、一般的に共有されている常識的な知識であるため、制度の実態を踏まえた、こまやかな描写が求められたのだろう。

馬任は十一年に及ぶ苦難の道のりを歩んだが、三十一歳で進士に及第する。これは実社会における及第者の年齢からすれば、遅くもなく、早くもない、平均的なものだろう。そして幹部候補生が選ばれる庶吉士となり、最終的に三部の尚書となる。三つの尚書を歴任するのは、白話小説だけでなく、現実の官僚世界でも最上級の出世である。苦難の末には知識人の最高の栄達を手にしており、ハッピーエンドで帳尻が合うどころか、おつりが十分に返ってきた勘定である。喜劇的な内容という点では、『古今小説』の「趙伯昇茶肆遇仁宗」に類する作品だが、舞台が明代に移ったことにより、

明代の読者が身をもって知る社会風景や制度、生活感覚の中で物語が展開するため、知識人の零落や出世のプロセスなどの細部が丁寧に描かれるようになったのだろう。『古今小説』では見られなかった具体性や写実性は、このように自ずから備わっていったと考えられる。また宋代もののようなファンタジーから離れ、よりリアリティーのあるディテールで笑わせることを志向しているのかも知れない。

次に、主人公の科挙及第時の年齢が馬任のほぼ二倍の六十一歳になる、そして同じように運命のいたずらのもとで人生が決定されてゆく、巻十八「老門生三世報恩」を見てみたい。

II-2 『警世通言』巻十八「老門生三世報恩」

正統年間、桂林府興安県の鮮于同は年老いても科挙を目指し、五十七才の時、郷試の予備試験を一位で通過する。試験官だった知県の蒯遇時は元来若者にひいきをして、老年の学生を嫌って、鮮于同を目の敵にしていた。しかし、郷試・会試とも、彼が試験官となって六十一才の鮮于同を合格させてしまい、これを運命と見定め交際を始める。鮮于同は刑部主事となり、大学士劉吉に齒向かって死罪を問われた蒯を救うため尽力し、蒯の息子が台州で裁判沙汰になると知ると台州知府となって救った。八十才で浙江巡撫となり、病身の蒯のため蒯の孫を教育し、蒯の三度の恩に対する報いが終わると、隠居して九十七才で死んだ。遅まきながら、四十年の官歴を歩いたのである。

正統末年は『警世通言』出版の百年ほど前になる。はじめの三分の二は科場の奇縁の物語で、残りは官界における報恩の内容になる。これこそ科挙を受験する知識人の、落第生の時代から、受験、合格、任官、退職までを描いた作品である。そこには科挙や官僚世界にまつわるさまざまな言説があり、その点でよく知られた作品である。なかでも老学生の鮮于同が、受験への挑戦をあきらめて貢生の資格で任官せよとアドバイスする人に対して発する独白は圧巻である。

あんたは「我」に貢生資格で官になれと忠告するが、それはただ「俺」が年をとって及第できないと思っているからだ。いやはや、ところが「頂点に立つのは老成した人」ということをご存じない。梁皓は八十二歳で状元で及第し、天下の気骨のある科挙の勉強に励む快男児に勇気を与えたのだ。「俺」がもし小さな官職を得ようとしていたら、三十歳でなれたんだ。せつせと裏から手を回せば、府なら副官、県なら長官程度にはなり、良心に背いてやっておれば、出世も家を富ませることもたっぷりできただろう。ただ、今は科挙の世の中なのだ。かりに孔子先生が科挙に合格できなかつたとしたら、誰が胸いっぱい学才を持った人と思うだろうか。かりに下田舎のガキが幾篇かの古くさい八股文をうろ覚えして、偶然ものの分からぬ試験官がやみくもに採点するのにぶつかれば、ぐうぐう眠っている間に進士合格を不当にも得てしまうのだ。普通は門下生になるような奴がいて、先生などと呼びはじめるから、ごちゃごちゃ話すようになり、頭に烏紗帽をかぶちまった奴をもう一度再試験して力量を試そうなんて誰も思わない。それだけじゃない。役人生活にもいろいろ不公平なことがある。進士合格の官僚は銅や鉄で作ったようなもの。いい加減にやっても、誰もそいつをダメだとはいわない。貢生官はビクビクして、卵を捧げて橋を渡るようなものなのに、それでも上司はアラ探しをする。按察の報告や取り調べの際に、ただ進士出身でありさえすれば、かりにあんたがとても貪欲で酷薄だと書きたてて、公正に見てその取り調べがある程度徹底していても、その結論といえば、貪

欲で酷薄な官僚の後継者がなくなると心配して、「この者、官僚としての行動に問題はあるが、初任であり、年若くもあり、まだ更生して、今後頑張ることが期待される。しばし、軽率だったということで、降格には及ばない」というにとどまり、そして降格して何年もせずに、もどおりの行動になる。もしいくらかの銀子を投げ出してその筋にたのんで挽回しておけば、ただの任地替えだけで、まったくそのまま問題ない。貢生官では一分の間違いが、十分に相当する。運悪く勢力のある者に出くわし、まったく手出しできなくなると、たとえあんたが真面目におつとめしていても、彼の力を借りて、進士のために身代わりにならざるを得ないのだ。こんなに多くの不公平なことがあるから、進士に合格しない以上、絶対官員なんかになるものか。「俺」はむしろ老書生としてこの身を終え、死んで閻魔様の前に行って、大声で恨みや不満を叫び、来世で出世をしてやろう。身を屈してちっぽけな官職に就き、終日人にイライラさせられて、「順気丸（気晴らし薬）」を飲んで暮らすなんてまっぴらだ²¹⁾。

白話小説の中でも、口頭語らしい勢いを伝える非常に長いセリフである。自分の言うことに酔っているためか、この長いセリフの第一声の自称は「我」で始まるのに、次からは「俺」になっている。「俺」は、『水滸伝』の好漢や荒くれ者たちが使う自称であり、自己の中で肥大化した自負や気概を誇示する言い方である。

注目すべきは、このセリフの長さである。このひと続きのセリフは作品の本話部分のほぼ十分の一を占めている。このような他者との対話形式を実質的に取らない、一人の人物が一気にまくし立てる長いセリフは、白話小説の中でも、特に短篇作品では非常にめずらしい。匹敵するのは、『醒世恒言』巻三「賣油郎獨占花魁」に登場する、客を取らなくなった美娘を説き伏せる劉四媽のものくらいか。

このセリフの長さ、やや荒っぽい下卑た言葉づかい、本来の話題からいくぶん脱線ぎみで、世間や物語中の出来事を正面から捉えず、反常識的で、半ば理性を失ったような、それでいてある種の真実を訴える内容などを見れば、中国近世の芸能・演劇にしばしば見える道化役の長い独白を思わせる。その道化たちは、劇中で展開されているストーリーから突然飛び出して、役柄を演じている役者たちではなく、観客に向かって直接語りはじめ、登場者や物語、また観客を含めた社会に対してコミカルかつ痛烈な批評をおこない、笑いを誘う。長い長いセリフを適度に間（ま）を入れながらも早口で、客を笑わせながら、よどみなく一気にまくし立てる。その行為自体が一種の芸で、長いセリフをうまく言い通せれば客は喝采を贈る。この長ゼリフは、演劇における道化の長ゼリフと関係があるのではないだろうか。文章（文字テキスト）でももちろん面白いが、その本領は口頭語によって発揮されるのではあるまいか。

そもそも鮮于同が、全体の三分の二にわたる科挙を語る部分において、各場面で笑いを取る道化的性格を有していることは明らかである。生酒を飲み過ぎて腹をくだし、能力を発揮できなかった鮮于同の答案を、もう一人の道化である蒯遇時が不出来な答案こそ年少者のものであろうと評価し、鮮于同を落第させるつもりがかえって合格させてしまう場面などは、いわばすれ違いコントである。道化となる知識人キャラクターと物語の喜劇性は、宋元以降の芸能にあったとされる、貧乏書生や知識人の愚昧を馬鹿にする「酸」作品の影響を抜きにしては考えられまい²²⁾。

「酸」について、鄭振鐸氏は、宋以降におこなわれた説唱芸能の一つである諸宮調のジャンルの一つで、「おそらく『秀才』を笑いの対象にした」傾向を持つものとしている²³⁾。また金文京氏は次のように述べている²⁴⁾。

『董西廂』が成立した頃、南北で行われていた宋雜劇・金院本と呼ばれる演劇には「目薬酸」「花酒酸」など多くの「酸」を題名とする出し物が含まれていた。「酸」とは、酸っぱい安物の漬け物を常食としていたことからくる貧乏書生の別稱といわれる。つまり当時インテリの迂愚さを諷刺する演劇が南北地域で廣く行われていたことになる。

そして先行の諸研究は元末から明中期の戯曲テキストに「酸」「酸丁」などの役柄の名称が見え、明清の演劇にも知識人を笑いものにするものが散見されることを指摘している。この作品の前部における鮮于同の形象は、その道化の知識人をモチーフとしたものではないだろうか。それは前節に見た馬任の形象にもあてはまるだろう。

この作品に対する従来の研究の多くは、明代末期の出版界で幅広い活動をした馮夢龍の創作として²⁵⁾、老年で貢生資格で官職を得た彼の人生と重ね合わせる読みを提示している。しかし、この作品を「酸」の流れの中で見るならば、彼の老年（執筆後の人生）と重ねるのではなく、戯曲の批評家として有名になる以前の、演劇などの芸能に影響を受けた若い時代の小説の習作と見るべきではないだろうか。

II-3 『警世通言』巻十一「蘇知縣羅衫再合」

この作品は、科挙の合格が三度もあるところが特徴である。

最初は、主人公の実父蘇雲の合格である。蘇雲はそれによって地方官に任命され、赴任途中で盗賊徐能に襲われ、妊娠中の妻と離れ、実家にも帰らずに他郷で暮らす。二つ目は、主人公徐継祖の合格である。彼は蘇雲の息子で、蘇雲の妻が徐能から逃げる途中で産んだのだが、逃げこんだ尼寺では育てられぬため捨て子とした。それを徐能が拾って徐姓の名前をつけて養い育てる。徐継祖と名付けられたその子は、進士及第し、地方を巡回する監察御史となる。そこに蘇雲夫婦が別々に訴え出て、養父である徐能が実父母の仇だと知り、徐能を処刑する。蘇家の人々が再会し、継祖も結婚をして、その子孫たちの合格が三つ目である。

この最初の合格について、筆者は前稿で「一般に白話小説に科挙が出てくる場合、ほとんどは無上の幸福を導くものとして描かれるが、この物語の冒頭にある蘇雲の進士及第は、幸せを導くものではなく、家族離散を招く遠因のように書かれていて興味深い」と指摘した²⁶⁾。蘇雲一家が離散する直接の原因は、江賊徐能が蘇雲の所持品と若く美しい夫人に目をつけ、悪心を起こすところにある。ただ、蘇雲の旅は、科挙及第後に任地に赴くためであり、知識人家庭の最大の榮譽であるべきことが、禍が起る発端になっている。科挙合格が思わぬ不幸をもたらすことがそれとなく語られるのである。二つ目の目の合格は、まさに科挙が登場する物語の普遍的なパターンである。物語の中盤にあり、主人公たちを幸福に導く転換点である。ただ、実父母がそれぞれ訴え出てから、養父徐能らを処刑するまでには、徐継祖が思い悩む場面があり、幸せになるまでには紆余曲折がある。三つ目の合格は、前章で論じた、物語のハッピーエンドの象徴となるケースである。

三つの科挙及第は物語の展開上それぞれ違った役割を担い、これまで見てきた科挙と物語の関係が三者三様の形で展開されている。特に家族の離散と再会のきっかけはすべて科挙の合格にあり、まさに知識人の家族を描いた象徴的な作品と言える。

II-4 『警世通言』の中の科挙

本章では、『警世通言』が収録する明代を舞台にした、科挙に関わる三つの作品を見てきた。いず

れも科挙が物語の重要な要素となり、巻十七と巻十八では受験生の生態や科挙の実態が具体的に描かれている。これは小論では論じなかった巻二十四「玉堂春落難逢夫」などでも顕著に認められる。なにより、主人公が知識人であり、主人公が科挙に合格するか否か、どのような運命や人生をたどり、どのように合格し、どのように出世するのかという部分が重要な内容になっている。これらは『古今小説』の明代を舞台にした作品にはない、『警世通言』でこそ確認できる特徴であり、二つの小説集の収録傾向には相違があるといえよう。知識人の出世をめぐる作品の傾向については荒木猛氏がかつて論じ、作品の舞台となる時代の新旧、作品が持つ歴史の長短という視点から分析し、物語の内容・傾向の違いを指摘している²⁷⁾。それは小論においても確認できたと思うが、収録された小説集によっても差異があることが見い出せた。科挙は明代の知識人やその家族にとって関心が高く、生涯を左右する重要で現実的な問題であり、その扱いに大きな違いがあることは、二つの小説集が秘めている本質的な違いを示しているのではないだろうか。それは編纂意図や想定している読者対象の違いであると考えられる。

巻十七と巻十八は、科挙の合格や金銭の有無、運命に右往左往させられる知識人の滑稽な様を笑う内容で、おそらく「酸」の影響にあるものと思われる。本来芸能と近い距離にあった喜劇的な内容が小説として文字テキストになると、その受容層が変わることもあり、同じ内容だったはずのものが違う意味、違った作用を持ちはじめたのだろう。滑稽な知識人の姿を描けば、彼らをとりにまく知識人社会の滑稽さにも筆は及び、それらはブラックユーモアとして、笑いの中でゆるされる（時にゆるされない）アイロニーやカリカチュアとなる。芸能などから持ち込まれた人物形象や世界観は、白話小説が描く題材・対象の範囲を拡大させたことは想像に難しくなく、その新しさは、大量に溢れる刺激的な情報の中で一際目立とうとする強烈な存在感を発揮し、軽度の刺激に慣れきった受容者に歓迎されたことを思わせる。その新しく危うい魅力こそが、新しい白話小説が描く世界の版図・バリエーションを押し広げ、知識人を描く次世代の作品に影響を与えたのだろう。

「警世通言」という書名は、社会的メッセージのようなものを帯びて、短篇の白話小説にちょっと高尚な感じを与え、読者になんらかの準備や変化を生じさせることを期待している。メディアとしての側面を考えれば、社会性とは一種のコマーシャル（商業性）であり、人々の注目を集め、人々に変化や影響を与える力を宿そうという野心や意図がかいま見える。「古今小説」という即物的な書名とは、本質的な違いがあるように思われる。

Ⅲ 「張淑兒巧智脱楊生」の明代後期の読み方

『古今小説』や『警世通言』で見られた科挙と物語の関係の特徴は、「三言」の第三集である『醒世恒言』が収録する作品においても同じように確認できる。それら旧来の特徴を受け継いだ作品がある一方で、『醒世恒言』ならではの新鮮さを持ったものも見られる。

一般的に、明末の短篇白話小説は、初期の芸能時代の特色を多く残したいわゆる「話本」から、話本を擬した読みものとしての性格を多分に内包した「擬話本」へと移行するといわれている。そこで見られる質的な変化を具体的にいうことは大変難しいのだが、「三言」に関しては、収録作品のボリュームの違いから一つのヒントが得られるように思う。『古今小説』と『警世通言』が収録する作品の平均葉数はいずれも二十葉弱であるのに対し、『醒世恒言』は三十葉弱なのである。葉数でい

ば平均約十葉増えて、物語の長さでいえば、一・五倍になっている。この違いは単に量的な問題に留まるのではなくだけでなく、物語の質（描写・内容・展開の仕方・語りなど）にも何らかの違いが存在することを想像させよう。

そこで小論のテーマである科学と物語の関係を考える上で、『醒世恒言』の中でも非常に特異な卷二十一「張淑兒巧智脱楊生」を採り上げてみたい。十六葉からなるこの作品は、『醒世恒言』の中では短い話で、内容としてはストーリー展開ができすぎた感があり、お世辞にも佳作とはいいいにくい。この作品に関する論考には、澤田氏に悪憎を描いた物語として採り上げた「索・刀・薬——『前前太平記』の一挿話と明代公案小説」²⁸⁾があるが、科学に関わる作品としても、他の作品とは違った趣向を取り入れ、まったく異趣の問題を有していると思われるものである。

Ⅲ-1 「辛未の状元」の父母の馴れ初めの物語

正徳年間、挙人の楊延和は、同じ年に挙人となった六人とともに、会試を受けるため都に向かう。その途中、一行は宿泊した寺院で僧侶たちから歓待を受け、ハメを外して大酔する。一行が就寝すると、その荷物を狙って僧侶たちは殺しを始める。僧侶たちの行動に当初から疑念を持っていた楊は危険を察知して、寺から脱出し、張老婆とその娘淑兒が住む家に助けを求める。ところが、老婆は僧侶たちの一味で、楊が来たことを密告しに家を出ると、淑兒は母親の本性を楊に告げ、早く逃げるよう勧める。楊はその恩を返すため、進士に合格したら必ず淑兒と結婚すると誓う。張老婆の家から逃げだし、途中で叔父楊小峰の援助を得て都に行くと、楊は進士に合格し、友人の力をかりて寺の僧侶たちを逮捕し、また淑兒との約束を果たして結婚をした。

時代設定となった正徳年間（1506～21）は、『醒世恒言』が出版された天啓七年（1627）から、百二十年から百年ほど前である。

前述のようにこの作品は短篇作品でも短いほうだが、主人公の形象はそれに反して、実に丁寧に書き込まれている。

お話は正徳年間、姓は楊、名は延和、字は元禮という挙人がおりまして、なんと四川成都府の籍貫です。先祖が南直隸の揚州府あたりに仮住まいをし、そのまま揚州の江都縣に住んだのです。この人は肌は雪のように輝き、唇は朱く塗ったよう、顔全体はまるで羊脂白玉（半透明の美しい玉）の彫刻のようでした。裴楷や王衍をなにかはせん。こちら楊元禮こそ、まさに神も氣も清らかな第一品の人物。しかも文才は天賦、學問は早熟、古書簿葉を開き、片手でたえずページをばらばらとめくり、一杯のお茶を飲む間もなく、ひとそろいの本を読み終えてしまいます。人々は斜め読みだと思っていますが、なんと彼がひとたびひもといた本は、每行毎句、すべて自分の体に身につけて記憶しているのです。文章を書くとなるや、紙を敷き、墨をすり、筆先に墨をふくませると、するする、さらさらと音がして、一気に最後まで書き上げると、紙全体にまるで猛雨のごとく墨が滴り、その一句一句が錦繡のごとき文章なのです。²⁹⁾

冒頭は、主人公の身分が挙人であることをいって始まり、籍貫が四川、現在の住処が揚州、才子佳人作品の男性主人公にぴったりの容貌など、主人公の素性が詳しく書かれる。それに才学についての描写が続き、彼の生い立ちや人となり書き込まれる。

七歳で大きい文字が書けるようになり、八歳では古詩が作れるようになり、九歳で八股文に精

通し、十歳で府学に進み、次年には第一位で成績優秀生となりました。父母は続けざまに死去し、六年喪に服し、元禮は孤児になったので、婚約すらもまだできませんでした。幸い、彼は学問に努力し、十九歳になると郷試を第二位で合格しました。トップ合格ではなかったため、心中悶悶としておりました³⁰⁾。

主人公の楊延和は、試験とはトップで合格するものというポリシーを持っており、郷試でトップ合格者（解元）になれなかったことが、ひどく気に入らなかった。かといって功名心が強いわけではなく、会試や殿試に頓着せず、友人に連れられて、半ば仕方なく受験への旅に出る。

旅に出た一行は、河南府の滎縣から七八十里離れた場所にある宝華禅寺に宿泊。僧侶たちから過剰な接待を受け、乱痴気騒ぎを始める。その中で、楊延和が非常に慎重な性格であることが繰り返し記される。

和尚が是非とも自分の寺にお泊まりくださいと執拗に引き留めるのを見て、「ただ楊元禮だけは疑いを抱き、ひそかに同年たちに『このような人里はなれた寺で、和尚は見かけは優しく丁寧だが、心の中は知れたものか。あいつが懇切に引き留めるのは、きっと理由があるはずだ』と話します」³¹⁾。また、和尚たちが振る舞う美酒に人々が酔いしれる中、「ただ楊元禮だけは半ばまで飲むと、酒がうまく濃く感じられ、心がだんだんとぼーっとしてきて、おもうには『こんな場所でこんなよい酒が手に入るはずはない！しかも頭がふらふらになってるし、これにはきっと秘密がある』と。すぐさま知恵をはたらかせ、おなか痛くなって、酒が飲めないふりをしました。」³²⁾。さらに、皆が泥酔して熟睡した後、気よかった和尚たちがにわかに盗賊となり、人々を殺め始めた場面では次のようにいう。

さて、かの楊元禮は心中疑っていたので、着物を着たまま眠りました。また寿命も尽きていなかったのでしょうか、寝台の上で寝返りをして、眠りにつけませんでした。屋外の様子を耳をそばだてて聴けば、酒宴が終わった後でも、静かで人の声がないようです。思うに『ここの和尚たちは田舎者であるから、残ったおかずをかき集めて、必ず集まってしばらく食うか、でなければ後片付けをするものだ。どうして静かで物音がしないのだ？』また少しすると、窓の外に忍び足が聞こえ、人の声をしたような。心中ますます怪しみます。また少しすると、聞こえたのは、他の部屋で『アイヤー』と続けてさけぶ声、また口ごもった声。またドタバタという騒ぎも聞こえ、慌てて飛び起き「しまった、まずい！賊僧たちの計略にはまった！」³³⁾。

このように、何事にも慎重な態度・思考を繰り返し述べるのは、都へ向かう一行「四十多人」の中で彼一人だけが生き延びたことの、その奇跡的展開に合理性を与えるためであり、また彼の性格を強調し、印象づけるためだろう。

都についた楊延和は見事な成績で合格し、その時の彼の心理状態なども描かれる。

元禮は…、都で會試を受験して、第二位の成績で合格し、嘆息しています「わたくし楊延和は最後まで他の人にトップ合格の席をゆずってしまった！とはいえ、今回合格することはできた。第一に約束を果たし、第二に恨みを晴らすことができることになった。」殿試では第一甲の第三位で合格し、翰林院に入りました。³⁴⁾

楊延和はトップ合格ではなかったが、それでも殿試で第三位であるから、優秀な成績には違いない。しかし、ここでもなぜかこの物語は主人公のキャラクター像とトップ合格を関連づけようとしている。とにかく、今回優先すべきは、順位ではなく、合格することで、その第一の理由は、張淑兒と交わした約束である。そのシーンを振り返ってみたい。

元禮は…、心でひそかに思うに「この娘（淑兒）は性格も頭もよく、私の命を助けてくれた。彼女の大恩を忘れることはできぬ。彼女と婚約をして、いつの日か彼女を娶って帰るのがなによりだ」と。すぐに娘に「小生は楊延和、字は元禮。年は十九歳で、南直揚州府の江都縣の人です。父母が早々と死んだため、いまだ結婚していません。あなたに命を救ってもらったので、結婚して夫婦になりたいと思います。いずれあなたをお嫁さんにすること、二言はありません。あなたのお気持ちは？」と言った³⁵⁾。

容姿と才学に優れた若い書生が少女にプロポーズするシーンは、才子佳人の物語の典型である。約束を交わして、難を逃れた楊は、優秀な成績で進士となり、若手官僚の中でも有望な人材が集まる翰林院に入る。そして知人の舒氏父子の力を借り、宝華禪寺の悪僧たちを捉え、叔父楊小峰が張淑兒を迎えに行き、楊延和は実家のある揚州に戻り、結婚する。絶体絶命のピンチに陥った主人公が、心優しいヒロインの少女と出会い、彼女の助けによって難を逃れ、やがて出世して彼女を迎えにゆくという話である。

そして、物語は例によってハッピーエンドの結末を迎えるわけだが、物語が完結するほんの少し前に、科挙に関わる非常にめずらしい記述がある。

さて、後に淑兒と元禮には子供が生まれ、辛未の年の科挙に状元で合格し、子孫は繁栄いたしました（却説後來淑兒與元禮生出兒子、又中辛未科狀元、子孫榮盛）。

「辛未の状元（殿試のトップ合格）」というが、物語の結末に描かれる科挙は、前述したように、主人公たちのハッピーエンドに花を添え、無上の幸福であることを象徴するものがほとんどであった。所詮は物語を終了させるための常套なのだから、このように具体的な干支まで書き込む必要はあるまい。知識人や科挙を具体的、写實的に描く傾向が強まっていたにせよ、名前さえ記されない子供が状元になった年まで書く必要はあるまい。

わざわざ干支を書き込むということは、何らかの意味があるのだろうか。

Ⅲ－２ 辛未の状元とその父親

明代の科挙はおおむね三年に一度あり、干支の丑・辰・未・戌の年に行われる原則だから、辛未に科挙は行われる。『醒世恒言』が成立した天啓七年から遡って最も近い年は、隆慶五年（1571）。その次に近いのは正徳六年（1511）である。作品の時代設定は正徳年間だから、仮にモデルがいるとするなら、この二度の科挙の状元に限定されよう。

隆慶五年の状元は、『明史』儒林伝や『明儒学案』に伝がある張元忭である。それによると、彼は陽明学に近づきながらも、王龍溪の学派とは一線を画し、最終的に朱子学に共感していた人物とされる。これ以外のエピソードとしては、後妻の件で投獄された徐渭を救助するのに尽力したことで知られていたかもしれない。とにかく、学者としては非常に高名だが、まるで学者肌の人物であり、小説に登場するようなキャラクターではない。

もう一方の正徳六年の状元は、明代末期の知識人社会で知らぬものはない、明代を代表する有名な人物である。楊慎、字は用修、すなわち明代後期の文学の泰斗、楊升庵（1487－1559）である。

そもそも三年に一度の科挙が近づくと状元となりそうな人物のことが噂になり、合格発表後にはその順位表や模範解答が出版されていたことは周知の通りである。知識人たちの宴席では、その話題で盛り上がったあとに、某年の状元は誰であり、その前は誰、その後は誰、前々回は…といったことを、酔いが回った頭で思い出し、口に唾しながら語り合い、科挙にまつわる雑学や裏話、不満

や偏見、美談やスキャンダルを談じ合う楽しみがあったはずである。明代末期には、楊慎が状元であったことは常識であったから、その年が辛未だったことも知識人社会において幅広く共有されていたことだろう。

さて、問題の中心であるこの作品の主人公は、辛未の状元ではなく、その父親である。楊慎の父の名前は、楊廷和。物語の主人公の名前は、一文字違いの、それも字形までよく似た楊「延」和。楊慎の父楊廷和は、小説の時代設定になっている正徳年間に、中央政界の要職を歴任した大官僚である。この作品の登場者は、明代末期に政治家、文学者として比類ない知名度を誇った楊親子のキャラクターを下敷きにしており、物語が終焉を迎える最後の最後の場面で、それを明かしているのではないだろうか。

楊廷和が死去する三年前に生まれた王世貞は、『嘉靖以来首輔傳』の中で楊廷和を筆頭に取り上げ、その伝は次のように興味深い内容になっている。

楊廷和、字介夫、蜀の新都の出身である。十二の時に郷試に合格した。十九歳で進士となった。翰林院庶吉士に任ぜられ、なったばかりで結婚をするため暇を乞い帰郷した。その人柄は美男子でかっこよく、性格は落ち着いて慎重で、観察力・洞察力があった。文章は簡明にして伸びやかで規則にかなっている。声律や華麗な言葉を使う詩詞を作ることを好まなかった。昔のことや民の苦しみ、国境地域の問題や法律家たちの言説を研究することを好み、天子を補佐する大官になるだろうと非常に期待されていた。³⁶⁾

出身は四川で、なんと十二歳で挙人、十九歳で進士登第し、エリート官僚候補者が選ばれる翰林院庶吉士となる。そこで、結婚のための帰省を願い出たことが記される。結婚のための進士及第早々の辞職は、実際若年の合格者にはよくあることで、それを許されることが名誉ともいわれるが、国家を揺るがす大事件が続いた武宗正徳朝を代表する大物官僚の伝に、極めてプライベートな一事が特記される点は興味深い。引用の後半部では、その容姿や人間性が優れていると強調され、特に、非常に冷静沈着、注意深く物事や人をよく見て判断するタイプと記されている。小説の主人公と完全に一致するわけではないが、ずいぶんと似通う部分が多く、二つの像が「延」と「廷」のごとく、ダブっているように感じられはしないだろうか。

楊廷和は周囲からの期待を背負いながら昇進を続け、正徳朝初期には戸部尚書、やがて吏部尚書となる。当時権勢を握った大宦官劉瑾との闘争後は、李東陽のあとの首輔となって、国内外の困難急事に当たりながら正徳朝の終焉を迎えると、次の嘉靖二年に致仕し、八年（1529）に七十一歳で生涯を終える。これが『醒世恒言』出版の約百年前である。この作品の作者は、王世貞が書いたこの伝記を目にしていたのではないだろうか。

そもそも楊慎と白話小説については、李卓吾直筆の評語がついた『水滸伝』と『楊升庵集』を楊定見が蘇州に持ってきたという、李卓吾批評の百二十回本『水滸伝』の出版エピソード³⁷⁾が有名であり、李卓吾が楊慎を信奉していたことも知られている。また楊慎の親族が起こした事件がノンフィクションの白話小説となっており、これについては森紀子氏「新都の楊氏と小説二題——烈婦と郷宦——」³⁸⁾に詳しい。さらに明末の沈自徴には、雲南瀘州に流された楊慎を描いた戯曲『簪花髻』もあった。彼の身辺と明代末期の白話小説や演劇などの文芸とは、非常に近かったのである。

なお李調元『升庵先生年譜』³⁹⁾によれば、楊慎の母の名前は、物語に登場する張淑兒ではなく、黃氏という。この物語は、楊親子に関わる実話ではなく、本来無関係であったものに、彼らの名前や人物像を当てはめただけのものなのだろう。楊廷和の思慮深さと彼が寺から逃げられたことの物語

的合理性が際立つ部分と、ヒロインとの衝撃的な出会いや好成績で進士になるなどのいかにも小説的なドラマチックな部分と、ややちぐはぐな点が目立つのはそのためであり、結果的に物語の表面的な展開を追っただけでは評価が低くなる作品なのである。作者の意としては、物語の完成度ではなく、ハッピーエンドを象徴する科挙及第一節にクイズの要素を取り入れて、前例のない物語の終焉を作ることにあっただけではなだらうか。物語の表面的な内容をほどほどに楽しみ、その最後にこっそりと隠されている「科挙の雑学クイズ」を発見して、有名人親子に関わるでたらめでスキャンダラスなストーリーとして読み解く、分かる人には分かるという楽しみ方をする作品なのだろう。

おわりに

小論は『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』の中から、主に明代を舞台にした科挙による出世を描いた作品について考察してきた。

小論のⅠとⅡでは、主として明代を舞台にした作品における『古今小説』と『警世通言』の科挙の描き方の差異を見た。知識人にとって人生の重大事である科挙に関して、描写の態度、質と量に違いがあることは明白である。この二つの小説集は従来「三言」の枠組みの中で考えられてきたが、上記の違いは編纂時における作品の採録方針が大きく異なっていたためだろう。そもそもそのネーミングの違いは制作者の意図の違いを雄弁に語るものであり、また二つの出版は少なくとも五年から十年の開きがある。また従来「三言」は馮夢龍が編纂したものとされてきたが、『古今小説』の成立には、万暦末期の南京郷試で解元になった葉有聲という著名人が関わっていたことはおそらく間違いない⁴⁰。また筆者は前稿で、『警世通言』の明代を舞台にした十二篇の作品の中で、蘇州府や揚州府内の地域が物語の重要な場面となるものが九篇もあり、その偏向は蘇州や揚州を意識した編集方針なのだろうと指摘したが、それは『古今小説』には認められないのである⁴¹。おそらく『古今小説』と『警世通言』の収録傾向をさらに細かく見てゆくと、科挙という題材以外にもさまざまな違いがあるように思われる。『警世通言』は『古今小説』と同一方針で作られたのではなく、『古今小説』にはなかった新しい魅力を備えて成立したと考える。

Ⅲでは、『醒世恒言』の巻二十一「張淑兒巧智脱楊生」を見た。この作品については、物語の最後に隠し込まれた雑学クイズをきちんと発見して解けるかというおまけがついて、むしろそちらで楽しむように作者は考えていたのだろう。さしずめ物語はそのクイズの前ふり、まくらの機能を果たすだけなのかも知れない。短篇の白話小説には、字謎や知恵比べを題材にした作品が少なからずある。そのほとんどは物語内の登場人物が出題し、別の登場者が考えて答え、時に答えられないという形式となり、いずれにせよ正答が作品の中に記されて、出題者と解答者の関係が完結し、それと同時に作品も完結する。しかし、この作品には正答が書かれていない。出題者である作者は見ず知らずの不特定多数の読者に向かって問題を発し、解答者とのやりとりが完結せぬまま作品は終了する。作品としてのしかるべき完結は、優秀な読者が正答を導き出した時に達せられるのである。作者と読者は見えない向こう側との擬似的な交信をして、出題者と解答者の関係が成立するのである。その作者の冒険は読者を信頼してこそであるだろう。そして自分の答えに確信を持った読者は、この物語を周囲の人々に読み聞かせ、聞き手たちに「さて、辛未の状元とは誰でしょう？」と、話を脱線させて、クイズを出して楽しんでいただろう。明代末期における短篇白話小説の作者や読者

は、もやはストーリーの内容をたどるだけでなく、物語世界から外れたところで、お互いの存在を仮想し、信頼して、楽しんでいるのである。

小論は、明代を舞台にした科挙を描く短篇白話小説をさまざまに取り上げ、分析してきた。やや論が散漫になったが、反面、その作品世界の拡大と内容の多様化をわずかに示せたのではないだろうか。今後の課題とせねばならぬのは『警世通言』である。『警世通言』の諷刺や揶揄は単に科挙だけではなく、「老門生三世報恩」の鮮于同のセリフのように官僚世界や政治にも及んでいる。科挙が知識人社会の一部である以上、それらについても考察せねばならないのだが、論点が拡散するため小論では扱わなかった。これからの課題としたい。

注

- 1) 「話本小説の「発跡変奏」について」(『天理大学学報』27 輯、1968 年 11 月初取)。のち『宋明清小説叢考』「発跡変奏」(研文出版、1982 年 10 月)所収。
- 2) この作品を詳細に分析したものに、山口建治氏「『三言』の一特質－「士人出世談」をめぐって－」(神奈川大学人文学会『人文研究』73 号、1979 年)がある。
- 3) 注 2 所掲山口氏論文。
- 4) 再説舜美在那店中、延醫調治、日漸平復。不肯回郷、只在邸舍中温習經史。光陰荏苒、又逢着上元燈夕。舜美追思去年之事、仍往十官子巷中一看、可憐景物依然、只是少箇人在目前。悶悶歸房、因誦秦少游學士所作『生查子』詞云…(略)。舜美無情無緒、洒淚而歸、慚愧物是人非、悵然絕望、立誓終身不娶、以答素香之情。在杭州倏忽三年、又逢大比、舜美得中首選解元。
- 5) 大木康氏は「馮夢龍「三言」の編纂意図について(続)——“真情”より見た一側面」(『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、1986 年 3 月)の中で「この話が『佳話』になる、言い換えれば、二人の私奔が社会的承認を得るに到るためには、舜美の進士及第そして任官という要素が重要な働きをしていることが見逃せない」と指摘し、「進士及第、任官、子孫の繁榮などのいわばオールマイティーの切り札を持ってきて話を結着させるやり方」と指摘している。
- 6) 今日爲甚說這段話。却有箇波俏的女子、也因燈夜遊玩、撞着箇狂蕩的小秀才、惹出一場奇奇怪怪的事來。未知久後成得夫婦也不?且聽下回分解。
- 7) 李元見称心女子聰明智慧、無有不通、乃問曰「前者汝父曾言、若欲登科、必問於汝。來朝吾入試院。你有何見識教我?」女子曰「今晚吾先取試題。汝在家中先做了文章、來日依本去寫。」李元曰「如此甚妙、此題目從何而得?」女子曰「我閉目作用、慎勿窺戲。」李元未信。女子歸房、堅閉其門。但聞一陣風起、簾幕皆捲。約有更餘、女子開戸而出、手執試題與元。元大喜、恣意檢本、做就文章。來日入院、果是此題、一揮而出。後日亦如此、連三場皆是女子飛身入院、盜其題目。待至開榜、李元果中高科。
- 8) 作品の「まくら」の部文で、「報應本無私、作了還自受」、「積善逢善、積惡逢惡」、「今日說一箇秀才、救一條蛇、亦得後報」などという。
- 9) 却說金玉奴只恨自己門風不好、要掙個出頭、乃勸丈夫刻苦讀書。凡古今書籍、不惜價錢、買來與丈夫看。又不吝供給之費、請人會文會講。又出貲財、教丈夫結交延譽。莫稽由此才學日進、名譽日起。二十三歲發解、連科及第。
- 10) 竹越孝氏「宋元南戲における「書生負心」の劇について」(中国古典小説研究会『中国古典小説研究動態』6 号、1993 年 5 月)、福満正博氏「梨園戲より見た『王魁』と、語り物『王魁』」(中国俗文学研究会『中国俗文学研究』第 9 号、1991 年、12 月)参照。
- 11) 「〈三言〉における悲劇的作品の考察」(『集刊東洋學』63 号、1989 年 11 月)、一・三「戯曲における団円の確立」参照。
- 12) 各作品の来歴などに関する研究は、小川陽一氏編著『三言二拍本事論考集成』(新典社、1981 年 11 月)にまとめられている。
- 13) 荒木猛氏「『三言』の分析－出世物語に関して－」(『函館大学論究』15 輯、1982 年 3 月)。
- 14) 至今延平府人説讀書人不得第者把鈍秀才爲比。

- 15) 向因貧困、學業久荒、今幸有餘資、可供燈火之資。且待明年秋試得意之後、方敢與小姐相見。
- 16) 却說黃病鬼黃勝、自從馬德稱去後、初時還怕他還鄉。到宗師行黜、不見回家。又有人傳信道、是隨趙指揮糧船上京、破黃河水決、已覆沒矣。心下坦然無慮、朝夕逼勒姊子六姨改聘。六姨以死自誓、決不二夫。到天順晚年鄉試、黃勝夤緣賄賂、買中了秋榜。里中奉承者填門塞戶、聞知六姨年長未嫁、求親者日不離門。
- 17) 注1所掲論文参照。また山口建治氏は運命論的な展開にあわせて、「酷薄な世情、墮落した士人の生態がことこまかく描き込まれており、作品全体を包む雰囲気は暗い」(注2所掲論文)と評している。
- 18) 「科挙と志怪 ——南宋志怪小説から『聊齋志異』まで——」(鹿児島県立短期大学『人文』13号、1989年6月)。
- 19) 黄小姐又差王安送銀兩到德稱寓中、叫他廩例入粟。明春就考了監元、至秋發魁。就於寓中整備喜筵、與黄小姐成親。來春又中了第十名會魁、殿試二甲、考選庶吉士。上表給假還鄉、焚黃謁墓、聖旨准了。…(中略)後來馬任直做到禮、兵、刑三部尚書、六姨小姐封一品夫人。所生二子、俱中甲科、簪纓不絕。
- 20) 『警世通信』人民文学出版社、1994年10月。「科挙制度、秀才一定要在本郷の省分応郷試、這時馬德稱在北京附近、所以不再旅途往返、而“廩例入粟”、以廩生資格去入国子監、在北京応試」。
- 21) 你勸我就貢、止無過道俺年長、不能個科第了。却不知龍頭屬於老成、梁皓八十二歲中了狀元、也替天下有骨氣肯讀書的男子爭氣。俺若情願小就時、三十歲上就了。肯用力鑽刺、少不得做個府佐縣正、味着心田做去、儘可榮身肥家。只是如今是個科目的世界、假如孔夫子不得科第、誰說他胸中才學?若是三家村一個小孩子、粗粗裏記得幾篇爛舊時文、遇了個盲試官、亂圈亂點、睡夢裏偷得個進士到手。一般有人拜門生、稱老師、譚天說地、誰敢出個題目將帶紗帽的再考他一考麼?不止於此、做官裏頭還有多少不平處。進士官就是个銅打鐵鑄的。撒漫做去、沒人敢說他不字。科貢官、兢兢業業、捧了卵子過橋、上司還要尋趁他。比及按院復命、參論的、但是進士官、憑你叙得極貪極酷、公道看來、拿問也還透頭、說到結末、生怕斷絕了貪酷種子、道「此一臣者、官箴雖玷、但或念初任、或念年青、尚可望其自新、策其末路、姑照浮躁或不及例降調。」不勾幾年工夫、依舊做起。倘拼得些銀子、央要道挽回、不過對調個地方、全然沒事。科貢的官一分不是、就當做十分。晦氣遇着別人有勢有力、沒處下手、隨你清廉賢宰、少不得借重他替進士頂缸。有這許多不平處、所以不中進士、再做不得官。俺寧可老儒終身、死去到閻王面前高聲叫屈、還博十來世出頭。豈可屈身小就、終日受人懊惱、喫順氣丸度日。
- 22) 「酸」については、胡忌氏『宋金雜劇考』(古典文学出版社、1957年4月)、三章(三)酸を参照。
- 23) 『中国文学研究』下「宋金元諸宮調考」(人民文学出版社、2000年1月)参照。
- 24) 『『董解元西廂記諸宮調』研究』(汲古書院、1989年2月)解説参照。
- 25) 畢魏の「三報恩」伝奇の馮氏の序に、自分が若い時分に書いたという内容(余向作老門生小説…)がある。
- 26) 拙論「明末の蘇州と揚州の物語——短篇白話小説『警世通言』から——」(『明人とその文学』汲古書院、2009年3月)
- 27) 注13所掲論文参照。
- 28) 前掲『宋明清小説叢考』所収。
- 29) 話說正德年間、有個舉人、姓楊名延和、表字元禮、原是四川成都府籍貫。祖上流寓南直隸揚州府地方做客。遂住揚州江都縣。此人生得肌如雪暈、唇若朱塗、一個臉兒、恰像羊脂白玉碾成的、那里有什麼裴楷、那里有什麼王衍?這個楊元禮、便真正是神清氣清第一品的人物。更兼他文才天縱、學問夙成、開着古書簿葉、一隻手不住的翻、吸力豁刺、不勾喫一杯茶時候、便看完一部。人只道他查點篇數、那曉得經他一展、逐行逐句、都稀爛的熱在肚子裏頭。一遇作文時節、鋪着紙、研着墨、蘸着筆尖、颯颯聲、簌簌聲、直揮到底、好像猛雨般灑滿一紙、句句是錦繡文章。
- 30) 七歲能書大字、八歲能作古詩、九歲精通時藝、十歲進了府庠、次年第一補廩。父母相繼而亡。丁憂六載、元禮因爲少孤、親事也都不曾定得。喜得他苦志讀書、十九歲便得中了鄉場第二名。不得首薦、心中悶悶不樂。
- 31) 只有楊元禮心中疑惑、密向衆同年道『這樣荒僻寺院、和尚外貌雖則懇懇、人心難測。他苦苦要留、必有緣故。』
- 32) 只有楊元禮喫到中間、覺酒味香濃、心中漸漸昏迷、暗道「這所在那得恁般好酒!且是昏迷神思、其中決有緣故。」就地生出智着來、假做腹痛、吃不下酒。

- 33) 却說那楊元禮因是心中疑惑、和衣而睡。也是命不該絕、在床上展轉不能安寢。側耳聽着外邊、只覺酒散之後、寂無人聲。暗道「這些和尚是山野的人、收了這殘盤剩飯、必然聚喫一番、不然也要收拾家火、爲何寂然無聲？」又少頃、聞得窗外悄步、若有人聲。心中愈發疑異。又少頃、只聽得外廂連叫噯喲、又有模糊口聲。又聽得匹撲的跳響、慌忙跳起道「不好了、不好了！中了賊僧計也！」
- 34) 元禮…、到京會試、中了第二名會魁、嘆道「我楊延和到底遜人一籌！然雖如此、我今番得中。一則可以踐約、二則得以伸冤矣。」殿試中了第一甲第三名、入了翰林。
- 35) 元禮、…心中暗道「此女仁智兼全、救我性命、不可忘他大恩。不如與他定約、異日娶他回去。」便向女子道「小生楊延和、表字元禮。年十九歲、南直揚州府江都縣人氏。因父母早亡、尚未婚配。受你活命之恩、意欲結為夫婦、後日娶你、決不食言。小姐姐意下如何？」
- 36) 楊廷和、字介夫、蜀之新都人。十二舉於鄉、十九成進士。改翰林院庶吉士、始告歸娶。廷和為人美風姿、性沈靜詳審。為文亦簡暢有法。而不好爲聲律華藻之學。惟以考究掌故、民瘼邊事、及一切法家言。蓋鬱然負公輔望云（『叢書集成初編』本）。この文章は後に『明史』楊廷和伝に踏襲される。
- 37) 「忠義水滸全書小引」。「吾探吾行笥、而卓吾先生所批定『忠義水滸傳』及『楊升庵集』二集與俱、挈以付之。無涯欣然如獲至寶、願公諸世。」
- 38) 『明末清初期の研究』（京都大学人文科学研究所、1989年3月）所収。
- 39) 『王船山楊升庵先生年譜五種』（北京図書館出版社、1997年5月）「（廷和）子、四。長即升庵公。少師元配一品夫人眉山黃明善善之女所出」。
- 40) 拙論「『古今小説』と葉有聲」（東方学会『東方学』112輯、2006年7月）参照。
- 41) 注26前掲論文参照。

なお、小論は平成21年度科学研究助成金を受けた研究の成果の一部である。

（本学文学部准教授）